

中世日本海域の墓標 その出現と展開－九州－

中島恒次郎（太宰府市教育委員会）

はじめに

石川県珠洲市野々江本江寺遺跡から出土した木製卒塔婆の社会的位置について、その帰属時期が平安時代後期（12世紀後半）である点、さらにその機能について九州から東北までの事例について議論が交わされた。

卒塔婆の機能については、多くの学説史が説くように、聖者の遺骨（仏舎利）や遺品を納めた土盛りを基調とする塔に起源を発するとされ、インド・サンチーのストゥーパ第1塔が引き合いに出される。その後中国・韓国・日本へと伝来し、「塔婆」「塔」として伝わってきたとされる。日本における「塔」字最古の記述は、『日本書紀』敏達天皇十四（585）年二月条に記される「塔」が知られており、その後の意味変容過程において、①供養具としての卒塔婆、②墓標としての卒塔婆、③境界に建つ卒塔婆の三種が、文献史料、絵画資料から読み取ることができている。いわば、供養→家族などの死者供養としての墓標→不特定多数者の供養と結界の内と外を画す標識へと意味が変容していったことが推測できる。

本研究集会では、野々江本江寺遺跡から出土した大型木製卒塔婆の機能についての議論が中心的課題であった。九州における卒塔婆の出土事例を紹介し、これらの課題に一定の方向性を示したい。

時間・空間変化

九州における卒塔婆出土事例を、表1に示した。これから読み取れるように、木製、石製の卒塔婆の出現時期は、平安後期（12世紀後半）に求めることができ、野々江本江寺遺跡事例と時間差なく出現している。しかし機能面では、九州における古い事例は、小型の木製卒塔婆であり、供養具としての機能が濃厚な資料である点が異なっている（図1）。また卒塔婆資料の空間的な広がりとなると、出現から約1世紀のズレがあり、鎌倉後期（13世紀後半）以降に増加傾向をみせる。この増加傾向は、いずれも墓標としての卒塔婆であり、被葬者を弔う、追善供養のための標識としての意味が強まっているものと考えられる。

塔婆造立の意味

卒塔婆造立の意味を問うことは、単に卒塔婆のみを見ていては理解できないため、平安後期から鎌倉末期を対象として墓制資料を見てみよう。既に別稿にて記述してきた①屋敷墓、②共同墓地、③石塔、④輸入陶磁器埋納率について検討した結果をまとめた表が、表2である（中島、2009）。

この表から見えてくることは、鎌倉期を境として墓制上の変化が「置換」していることが読み取れる。具体的な時間軸は、13世紀後半頃を示している。いわば、本格的な中世的社会が動き始めた時と一致していることが分かる。そこで、2つの項目に分けて考えてみよう。

a. 権力継承権を正当化する装置としての塔婆

鎌倉期を様相置換の期間として、葬儀の場で葬儀参列者に対するステータスシンボル表徴のための装置が、同時代生活者でなくても被葬者の階層を知ることができる装置として様々な道具が変容していく様をみることができる。これは、崩れてはいるものの古代的制度の「残映」と中世的な領主制に基づく地域統治制度が共存した時代から、自らの階層的位置を自己主張し、かつ継承しなければならなくなってしまった時代への変化を表現しているものと考えられ、供養具としての卒塔婆が墓標として石造化

していく時代背景をみることができる。

b. 境界に建つ塔婆

供養具としての卒塔婆が、先祖供養のための標識としての卒塔婆へ、そして不特定多数者への境界内外を分かつ標識としての卒塔婆へと時間変化に伴い、意味変容をきたしてきた様を見る事ができる。九州内において、近世に集落の内外を分かつ場に「六地蔵」が造立されており、まさにこれらが境界に建つ塔婆の事例である。考古事象上、これがどこまで遡るのか、境界に建つ不特定多数者を供養する卒塔婆を見出すことはできていないが、今後、この視点での抽出を試みてみたい。

おわりに

九州においては、平安後期に供養具として小型の卒塔婆使用が始まり、その後、権力継承権正当化の装置として「朽ちない墓標」である石製卒塔婆が造立されるようになる。今回の研究集会の主題である、境界に建つ卒塔婆事例を見いだすことはできなかったが、集落の内と外を画する場に建つ卒塔婆の出現時期ならびに広がりをおうことは、人と物と情報の往来の多さを知る上で重要な素材の一つである。意味の変容の姿とともに、考古事象上類例の探索を行い、これら卒塔婆の存在する社会的位置と意味を問うていきたい。

引用文献

神埼町教育委員会（1994）『城原三本谷南遺跡』神埼町文化財調査報告書第56集

中島恒次郎（2009）「九州の中世墓」『日本の中世墓』狭川真一編 高志書院

表1. 九州における塔婆

■木製卒塔婆出土遺跡一覧【九州】

墓集成 番号	遺跡名	遺構名	時代	出土遺物	備考	所在地	関 連 文 獻
1 095	大西屋敷遺跡1区	SE007(井戸)	平安後期 【12世紀後半】	卒塔婆	平安後期~鎌倉初期の屋敷	佐賀県佐賀市鍋島町大字八戸溝	1
2 -	城原三本谷南遺跡	SX2061(河川)	平安後期 【12世紀後半】	卒塔婆		佐賀県神埼市大字城原字三本谷	2
3 300	大宰府史跡 〔觀世音寺〕	70502130(池状遺構)	室町期 【土器種類では室町期】	卒塔婆	嘉永三(1850)年既卒塔婆 【12月10日から安政元年】	福岡県太宰府市觀世音寺4丁目	3
4 299	大宰府史跡 〔觀世音寺〕	455X1200(池状遺構)	室町期	卒塔婆	元暦二(1852)~1300年既卒塔婆	福岡県太宰府市觀世音寺4丁目	3
5 301	大宰府史跡 〔觀世音寺〕	109 - 111SD0200(築)	室町期	卒塔婆	嘉永二(1850)年既卒塔婆	福岡県太宰府市觀世音寺4丁目	3
6 130	井細野5遺跡	25016(池状遺構)	室町期	卒塔婆	長徳三(1409)年、貞正五(1464)年既卒塔婆	福岡県福岡市博多区井細野2丁目	4

■石製塔婆一覧【九州 平安後期~鎌倉期 記年記載資料】

墓集成 番号	遺跡名	遺構名	時代	形式	備考	所在地	関 連 文 獻
1	園吉堂梵宇 阿弥陀三尊碑		平安後期	三尊碑	延久二(937)年二月十七日立之	福岡県糸島市祇木櫛町	5
1	本光寺荒塔婆		平安末期	荒塔婆	安元元(1178)年十月五日	熊本県熊本市西区荒塔婆	5
2	円谷寺跡塔婆		鎌倉期	荒塔婆	延久四(1193)・建久七(1196)年 刻綴から円谷寺僧侶の墓塔と考えられる。	熊本県熊本市西区荒塔婆	5
3	延喜寺荒塔婆		鎌倉期	荒塔婆	仁治四(1261)・文永五(1269)年	大分県豊後高田市延喜寺	5
4	延平寺塔婆		鎌倉期	荒塔婆	文永六(1269)年	大分県豊後高田市延平寺	5
5	延喜寺荒塔婆		鎌倉期	荒塔婆	文永七(1270)年	熊本県球磨郡多良木町延喜寺	5
1	中尾家ケ泊五輪塔		平安末期	五輪塔	延喜二(1170)・承安二(1172)年	大分県竹田市中尾家ケ泊	5
2	小村萬葉堂五輪塔		鎌倉期	五輪塔	寛喜四(1222)年	宮崎県宮崎市生田小村	5
3	西安寺跡五輪塔		鎌倉期	五輪塔	正嘉元(1257)年	熊本県玉名郡玉名町	5
4	延明寺土輪塔		鎌倉期	五輪塔	正元元(1260)年	大分県宇佐郡延明寺下毛	5
5	金谷寺跡五輪塔		鎌倉期	五輪塔	建治二(1225)年	熊本県玉名郡金谷町西曾水	5
6	諸福寺跡五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安二(1280)年	福岡県大字田中藤田町	5
7	勝福寺五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安西(1281)年	熊本県球磨郡深田村荒度	5
8	舟乗寺五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安西(1281)年	熊本県荒尾市舟内山	5
9	觀音寺五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安八(1285)年	宮崎県都城市清武町黒坂	5
10	八重里五輪塔		鎌倉期	五輪塔	弘安九(1285)年	大分県大野郡別濃町	5
11	西宮寺跡五輪塔		鎌倉期	五輪塔	正応元(1298)・嘉元二(1304)年	熊本県玉名郡玉東町	5
1	熊野神社石碑		鎌倉期	自然石板碑	建長七(1255)年	福岡県糸島市古賀町蓮内	5
2	誠國寺石碑		鎌倉期	自然石板碑	弘長二(1260)年	福岡県糸島市大字西町古田	5
3	上長井呂石板碑		鎌倉期	自然石板碑	正元五(1292)年	熊本県玉名郡南伊藤町	5
4	大世寺石碑		鎌倉期	宝幢石碑	承仁元(1293)年	熊本県相本郡野田町川尻	5

■尾註文部

1 熊本市教育委員会(1994)『大西屋敷遺跡 Ⅰ』佐賀市文化財調査報告書第56集

2 神埼町教育委員会(1994)『城原三本谷北遺跡 城原三本谷南遺跡』神埼町文化財調査報告書第56集

3 九州歴史資料館(2007)『觀世音寺 遺物編』

4 福岡市教育委員会(1988)『井細野5遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集

5 多田勝彦(1975)『九州の塔婆 上巻』(財)西日本文化協会

表2. 九州における墓制

	平安中期	平安後期	鎌倉期	室町期
塚敷墓	■			
共同墓地	■	■	■	■
塔婆【木製】		■	■	■
塔婆【石製】		■	■	■
土葬	■	■	■	■
火葬	■	■	■	■
埋納品【陶磁器埋納】	■	■	■	■
埴草堂	●			■

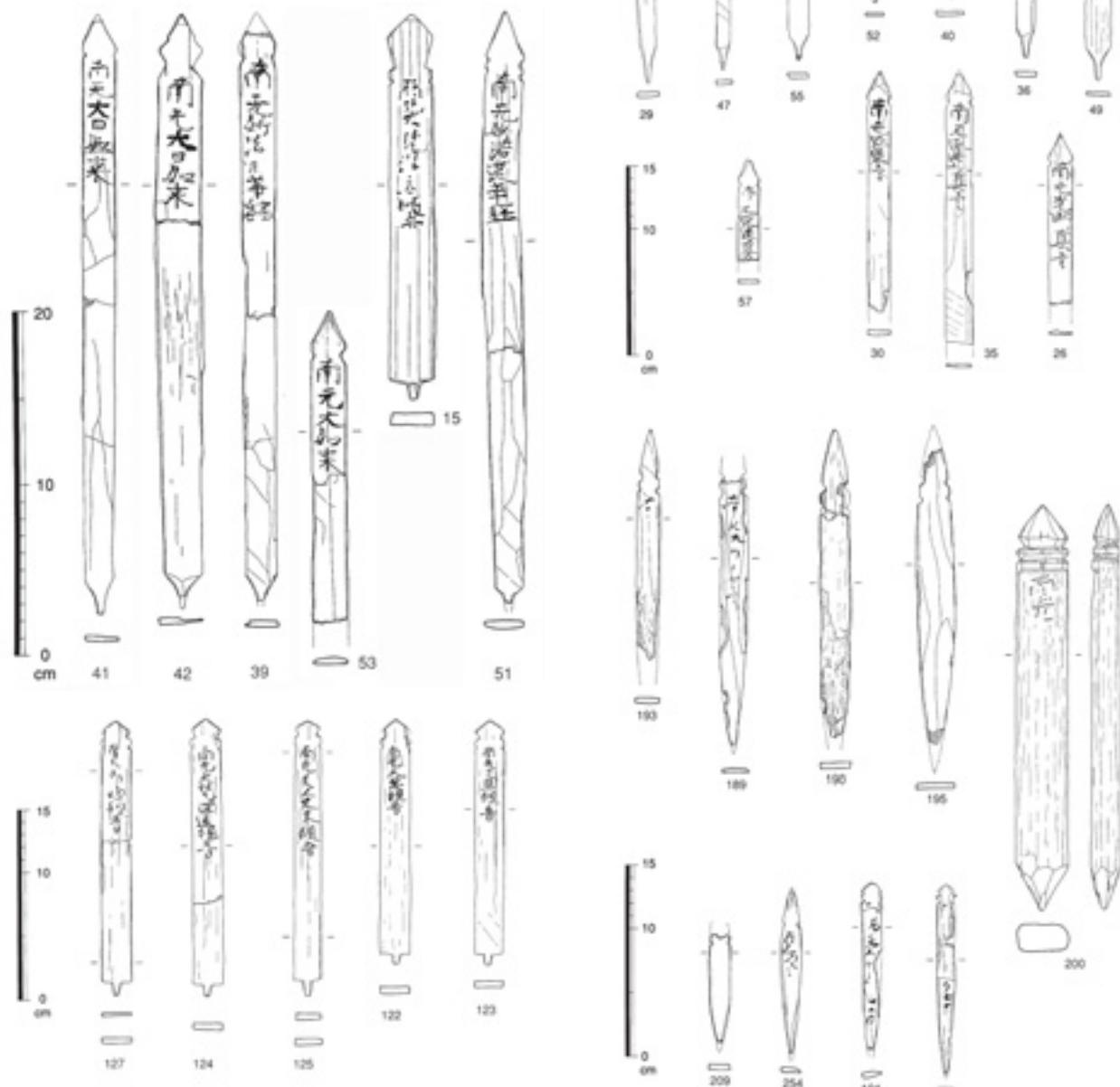
➡
➡
移行

図1. 木製卒塔婆【佐賀県神埼市城原三本谷南遺跡（神埼町教育委員会、1996）】